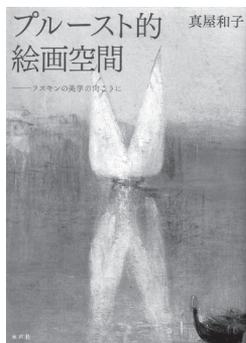


書評

真屋和子著『プルースト的絵画空間——ラスキンの美学の向こうに』（水声社、2011年）



富士川 義之

『失われた時を求めて』に着手する以前の若きマルセル・プルーストには、長いこと長篇を書こうと努めながらも失敗を繰り返す苦闘の時期があった。小説を書くことの意味や方法をなかなか見出せなかったためである。処女作『楽しみと日々』、未完の小説『ジャン・サントウイユ』での挫折の体験を経たプルーストが、再び創作活動に意欲をもやす大きなきっかけとなるのが、ジョン・ラスキンの著作との出会いであった。

プルーストの熱狂はとどまるところを知らず、英語に堪能な母親をはじめ有力な協力者の援助を得て、英語があまり読めないのに大胆にも『胡麻と百合』と『アミアンの聖書』の翻訳を手がけるばかりか、ラスキンの叙述に従って、アミアン大聖堂やヴェネツィアに巡礼の旅にも出かけるほどだった。ラスキンへの熱愛を通じて、「世界は突然、私の目に限りない価値を取り戻した」と、プルーストは語っている。まことに稀有とも言うべき幸福な文学的出会いであり、その出会いを通じての実に豊かで充実した生への覚醒にほかならなかった。ラスキンはプルーストの目を大きく開かせたのである。

「ラスキンの美学の向こうに」という副題を持つ本書は、プルーストに多大な影響を与えたヴィクトリア朝時代を代表する美術批評家ラスキンの文学や思想と綿密に関連づけながら、『失われた時を求めて』におけるプルーストの美学、とりわけ「プルースト的絵画空間」がどのようにして築かれたかを探ろうとする力作である。1895年に書き始めていた『ジャン・サントウイユ』は、1899年には完全に行き詰まってしまう。翌1900年にラスキンが81年の生涯を閉じたあと、プルーストはラスキン翻訳を

進めるかたわら、ラスキンに関する文章を次々に発表する。この時期にラスキンの書物との出会いがなければ、「今ある形での『失われた時を求めて』は存在しなかったといっても過言ではないだろう」と著者は言う。そして「ラスキンを知れば知るほど、プルーストを読めば読むほど、プルーストのページのそこそこにラスキンの影響が感じられるのはそのためであろう」と述べている。

著者は、両者に共通する芸術観をあらわす鍵となる概念として、「反リアリズム」と「印象主義」という言葉を用いている。プルーストはこれら二つの概念に基づく芸術観を創作上の土台に据えることによって、『失われた時を求めて』という長篇小説の執筆へと大きく踏み出すことができたのである。その際、プルーストがラスキンから学んだものは、芸術にとって何よりも重要なのは、洞察力と想像力であるということだった。では、ラスキンの考える洞察的な想像力とはどのようなものなのか。彼は『近代画家論』第三巻において、自らの体験を語ることによって、より深い真実をとらえる想像力についてこう語っている。

朝早くスイスのある町を出発しようとしたとき、彼は家屋の後ろの雲のなかにアルプスの一峰を見たことがある。それは自分の知らない嶺であり、いままでに見たどれよりもはるかに雄大に見えた。彼は一瞬、朝の光に銀色に輝いている嶺に目を奪われ、強烈な荘厳の感に打たれる。「だが、次の瞬間、その知らないアルプスの嶺は、町のある工場のガラス屋根であって、近くの屋根より高く聳え立って、その煙突から立ち昇る美しい青色の煙のために縹渺朦朧となっていたことに気づいたのだ」。

ラスキンは、ガラス屋根をアルプスの峰と取り違えたわけだが、たとえ錯覚であっても、あるものに、別のあるものを見るということは、彼によれば、「裏面に透徹して全体を理解する力」がそこに働いているからだと考える。従ってラスキンのいう想像力は、洞察力と深く関わることになる。このように述べたあと、著者は『失われた時を求めて』のなかで主人公がエルスチールという架空の印象派画家の描いた絵を前にして、言いようのない喜びを感じる場面の分析に移ってゆく。その場面で主人公は強い照明を受けた平らな壁面を、奥行きのある街路と取り違えるのだが、この体験は、朝の光を浴びて輝く工場のガラス屋根を、高さとお行きのあるア

ルプスの嶺と錯覚するラスキンの体験と類似しているという。ここでの分析が冴えているのは、この体験が長篇小説のなかで、「挫折を味わった主人公が書くことの意味、書く方法を見出す場面の布石となっている」と指摘しているからである。「一度は挫折したプルーストが見出した、書く方法の一つは、二つの異なる対象をとり、それらの間の関係を設定すること、つまり、隠喩、比喩によって二つの対象を結びつけることである。そうすることによって真実を描くことができると考えた」のである。

たとえ視覚上の錯覚であったとしても、それをある一つの現実を示すものとしてとらえる。芸術家の仕事は、このように自らの印象をできるだけ忠実に再創造することにあるとプルーストは考えたのである。言いかえれば、プルーストの長篇小説において話者が見出す、書く方法とは、まさに「メタフォーール隠喩」の発見にほかならなかった。また、芸術におけるメタフォーール隠喩は、人生における、あるいは生活における、無意識的記憶と同等の価値を持つものであるとされる。主人公がある寒い日、プチット・マドレーヌ菓子のかげらの混じった紅茶を口にしたとたん、身震いするような喜びと快感を覚えるあの有名な場面は、少年時代にコンブレーで味わった味覚であって、小さなマドレーヌのかげらがコンブレーでの遠い過去の記憶を呼びさます。「過去と現在の遠くはなれた二つの感覚を結びつけるという意味において、プルーストは、芸術における隠喩と、日常生活における無意識的記憶との間に等価性を見出したのである」。

このように、知性や合理性に限界を感じ、豊かな洞察力ある想像力のみが現実や論理の高い壁を乗り越えられるというプルーストの考えは、ラスキンの思想をプルーストが同化し、それを鍛え直すことによって、生み出されたものではないかと、著者は説く。さらにまた、ラスキンとの関連でもう一つ重要な指摘がなされているが、それは創作方法である。プルーストは長篇小説の終わり近くで、主人公がこれから書こうとする書物を、「ブフ＝モード【牛肉の蒸し煮料理】のような作り方」で生み出すだろう、と書いている。ラスキンもいかに絵画を構成すべきであるかを説きながら、「一種の煮込み料理ラグー」のたとえを用いている。彼にとって、一枚の絵、ひいてはすべての芸術作品は、各部分の間に調和のとれた関係を持つものでなければならない。それこそまさにコンポジション構成なのだから、とい

うことになる。このあと著者はこう述べる。

《野菜の香りが牛肉に移り、また牛肉の旨みが野菜にも移り、それらを浸すスープを風味豊かなものにする、いわば味の相乗効果ははたらいっているような料理は、うまく構成された芸術作品にもたとえられるということであろう。ラスキンにおいては、芸術を語る時、建築・音楽・絵画・文学などカテゴリーの壁がとり除かれている。ここではリア王を書くための方法が、最後は煮込み料理にまでつながっているのである。「教会を築くように」書物を編む、とも書いているプルーストは、まるでラスキンの教えに従うかのように、書こうとしている書物を説明するためには、あらゆる種類の芸術から比較を借りなければならない、と主張する。絵画について語るのに音楽の言葉を用い、建築を語るのに絵画を重ね合わせるといった発想は、必ずしもラスキン独自のものではないかもしれない。しかし、肉、野菜の煮込み料理のなかに、絵画や建築の構成を見る人は、ラスキンをおいてほかにはいないのではないだろうか。》

ちなみに、先のラゲールの一節は、ラスキンの『建築と絵画についての講義』のなかであり、プルーストはこの本を暗誦している、と自負していたという。ともかく、創作方法について語る時に、二人が煮込み料理のたとえを用いているという指摘は、浅学の評者には初めてのことで大層示唆的であった。その説得力ある論証の見事さに感嘆しないではいられない。

本書は、以上のように紹介したラスキンを媒介とするプルーストの想像力が、J. M. W. ターナーの《オンフルール 上方からの眺め》、フロベールの文体、文学と絵画における踊るサロメの心象、バーン＝ジョーンズの《魔法にかけられるマーリン》や《黄金の階段》、マネの《オランピア》、『ヴェネツィアの石』所収の「ゴシックの本質」などと、どのように結びつき、また反発するのかということ、明晰な文体で鮮やかに解き明かしてみせている。ラスキンとプルーストに関するその学識は広大にして博引旁証ただならぬものがある。なかでも評者にとって興味深いのは、第二章「プルーストとターナー」である。そこでは、これまでモネなど印象派の画家をモデルとしていると考えられてきたエルスチールが、ターナーをモデルにしているのではないかという新説を、実証的な方法に基づく論証とともに提示する。もちろん、この新説の是非について判断する資格も能

力も評者にはない。だが、エルスチールの「カルクチュイ港」の描写は、ターナーが、同じ港を異なる角度から描いた一連の水彩画《オンフルール》を喚起させないだろうかという鋭い直感から出発して、『ラスキン全集』やブルーストの草稿や書簡などの膨大な資料を博捜しながら、《オンフルール》が、ブルーストのいう「^{メタフォー}隠喩」の鍵を握るのではないかという仮説を立てて、「カルクチュイ港」は小説の終わり近くの「^{メタフォー}隠喩の発見」につながる重要な役割を果たしていることを説くあたり、素人目にもスリリングでさえあると言ってよいだろう。

ブルーストは最終巻「見出された時」において、作家にとっては、文学と絵画という二つの芸術が絡み合い、重ね合わせられることによって意味を持ち、それらに共通する要素を「^{メタフォー}隠喩の環」によって結びつけるときにしか真実は始まらない、という強い確信を得るにいたる。そのとき作家は「一つの^{メタフォー}隠喩のなかで、時の偶然性からまぬがれる」ことができるという。こうしてその強い確信とともに、『失われた時を求めて』の作家ブルーストが誕生することになるのである。